翻刻「映画論」

〈解題〉

前号にひきつづき、江戸川乱歩が若き日に書き綴った映画についての論文を紹介していく。大学を卒業し、職を転々としていた時代の乱歩は、映画にも興味を持ち、弁士を志したこともあった。そのような時期、大正六年六・七月に図書館で調べた資料をもとにして、大正九年七月に執筆したと思われる原稿の一部である。

今回紹介するのは、「映画論」と題された九枚の草稿である。他のいくつかの映画関係の原稿とともに、「MOVIE」と書かれた封筒に入れて保存されていた。二十五字×二十四行の原稿用紙に書かれている。原稿一枚目の中央上部に165という数字があり、最後は188となっている。長大な論文の一部をなすはずのものだったということであろう。

『大衆文化』第五号では「活動写真のトリツクを論ず。」を掲載した。これは映画の撮影におけるトリックの意義と、具体的なトリックの分類とを記述したものである。

それと異なり、この「映画論」は、芸術としての映画の位置づけを探る論文になっている。同時期に書かれた「写真劇の優越性につきて」と近い内容である。「映画論」とくらべ「写真劇の優越性につきて」の方が、よりまとまりのある文章になっていることを考えると、その前段階で書かれたものなのかもしれない。

「映画論」では、まず乱歩は映画史をたどることからはじめる。活動写真は当初、写真が動くことだけで観客を満足させていたのだった。それが、次第にトリックを用いて現実にはありえないものを見せるようになる。さらには、そういったものにも観客は飽きていくという経過をたどる。

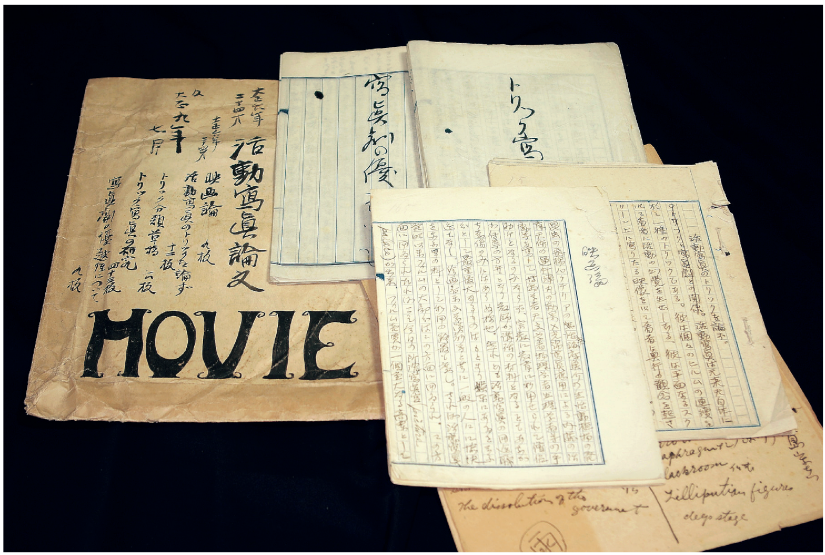
活動写真の次の段階として、筋を持った劇、つまり写真劇が望まれるようになってくる。だが、舞台で演じられる芝居をそのまま撮影するようなものは、写真劇としては評価できない。活動写真の特性を活かした、写真劇として独自のものが製作されるようになったのである。

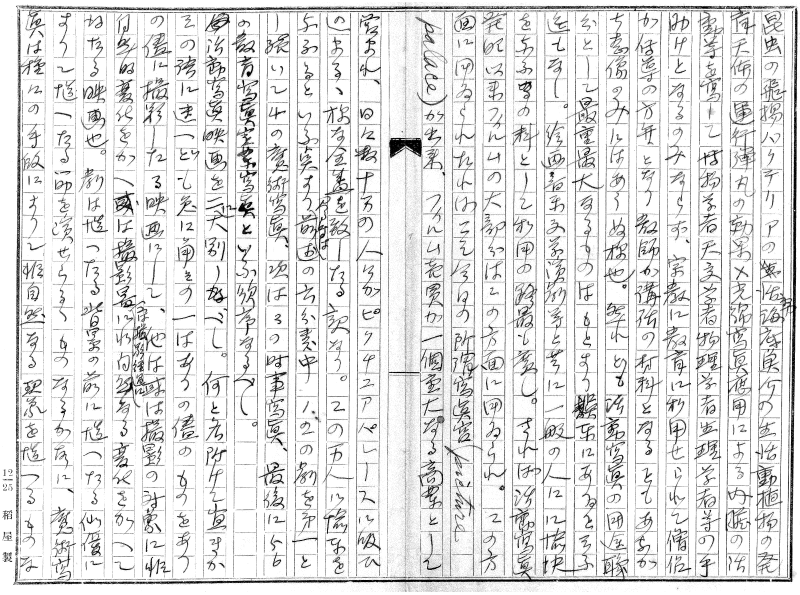
そして、舞台劇と写真劇との差異について乱歩は考えながら、芸術としての写真劇というものをとらえていこうとする。その前段階として、舞台劇とはいかなるものかというこれまでの研究を見ていく。舞台劇の、観客に与える効

果にも注目しつつ、劇には他の芸術のいくつもの要素を取り入れた、混血的なところがあると評価したところでこの原稿は途切れている。

この草稿を見ると、この時期の乱歩が、映画だけでなく、さまざまな芸術に関する資料に触れていたことがわかる。ジャンルの本質について考えようとする乱歩の傾向は、のちに探偵小説というものへと向かうことになる。しかしこの段階で、映画や、舞台というものについても、このような思索がおこなわれていたのであった。こういった源流があることを確認したうえで、乱歩の小説作品や探偵小説論について再検討することも有意義であろうと思う。

落合　教幸
（立教大学大学院博士後期課程・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）



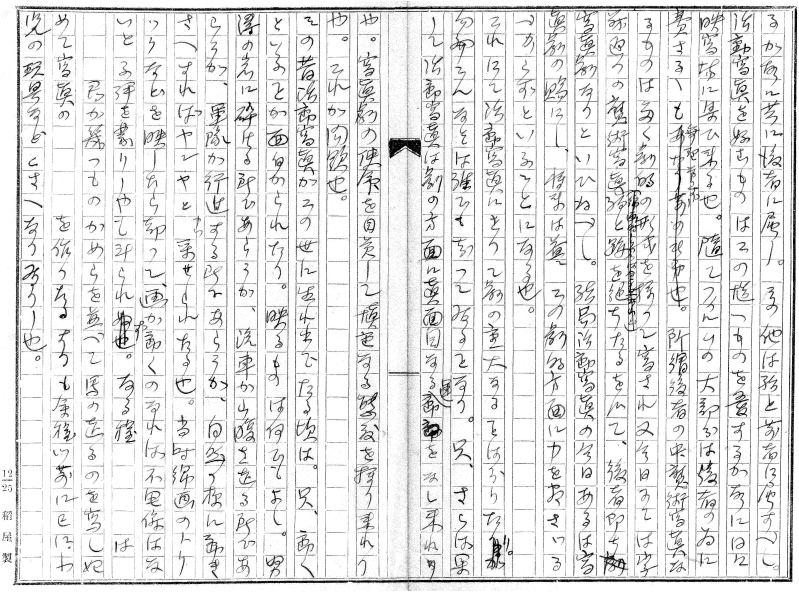


12-25 稲屋製

［　］消してある部分　（　）挿入部分
■　ぬりつぶしてある文字　□　判読できなかった文字

映画論

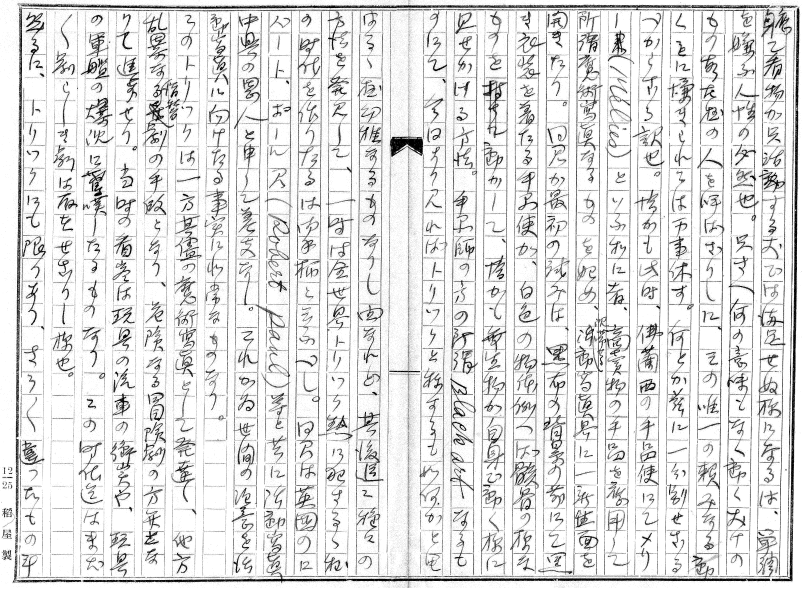
昆虫の飛揚バクテリアの［生］活［動］海底魚介の生活動植物の発育天体の運行弾丸の効果X光線寫眞應用による内臓の活動等を寫して博物学者天文学者物理学者生理学者等の手助けとなるのみならず、宗教に教育に利用せられて僧侶が伝導の方弁となり教師が講話の材料となることもあながち想像のみにはあらぬ様也。然れども活動寫眞の用途職分として最重最大なるものはもとより娯楽にあること云ふ迄もなし。絵画音楽文学演劇等と共に一般の人々に愉快を与ふるの料として利用の路最も廣し。されば活動寫眞発明以来フィルムの大部分はこの方面に用ゐられ。この方面に用ゐられたればこそ今日の所謂寫眞宮（picture palace）が出來、フィルム売買が一個重大なる商業として営まれ、日々数十万の人々がピクチュアパレースに吸ひ込まるゝ様な全盛を致したる訳なり。この万人に愉楽を与ふるといふ点より［見る時は］前述の六分類中12の劇を第一とし続いて4の魔術寫眞、次は3の時事寫眞、最後に56の教育寫眞実景寫眞といふ順序なるべし。



■活動寫眞映画を二［に］大別し得べし。何と名附けて宜きかその語に迷へども兎に角その一はありの儘のものをありの儘に撮影したる映画にして、他は或は撮影の対象に非自然的変化を加へ或は撮影器［又は撮影経過に］に非自然なる変化を加へて得たる映画也。劇は慥へたる背景の前に慥へたる俳優によりて慥へたる筋を演ぜらるゝものなるが故に、魔術寫眞は種々の手段によりて非自然なる現象を慥へるものな

るが故に共に後者に属し。その他は殆ど前者に属すべし。活動寫眞を好むものはこの慥へものを愛する故に日々映写場に集ひ来る也。随てフィルムの大部分は後者の為に費さる、も［無理ならず］［あたり前の次第也］。所謂後者の中、魔術寫眞なるものは多く劇的の形式を採つて寫され又今日にては字義通りの魔術写真［線画的トリックは含まざれど］殆ど跡を絶ちたるを以て、後者即ち［劇］寫眞劇なりといひ得べし。結局活動寫眞の今日あるは寫眞劇の賜にし、将来は益々この劇的方面に力を尽さゞるべからずといふことになる也。

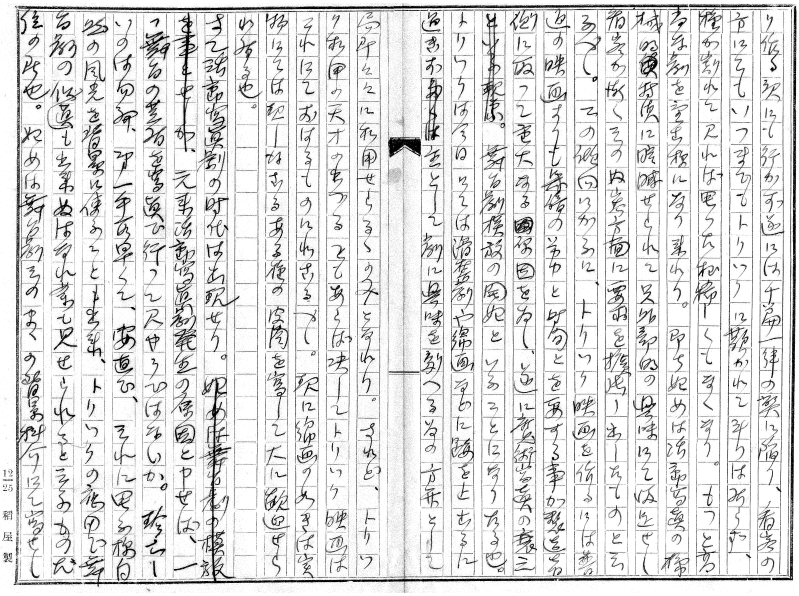
これにて活動寫眞にとりて劇の重大なることは分りた［り。］［るが］勿論こんなことは誰でも知つて居ることなり。只、さらば果して活動寫眞は劇の方面に真面目なる［運］動



［動］をなし來れりや。寫眞劇の使命を自覚して慎重なる態度を採り來れりや。これが問題也。

その昔活動寫眞がこの世に生れ出でたる頃は。只、動くといふことが面白がられたり。映るものは何でもよし。怒濤の岩に砕ける所であらうが、汽車が山腹を走る所であらうが、軍隊が行進する所であらうが、自然の様に動きさへすればヤンヤと［カツ］采せられたる也。当時線画のトリックなどを映したら却って、画が動くのなれば不思議はないと不評を蒙りしやも計られ［ぬ也］［ず］。なる程（空白四マス）は（空白四マス）君が幾つものかめらを並べて馬の走るのを寫し始めて寫眞の（空白四マス）を作りたるよりも余程以前に已に小児の玩具などとさへなり居りし也。

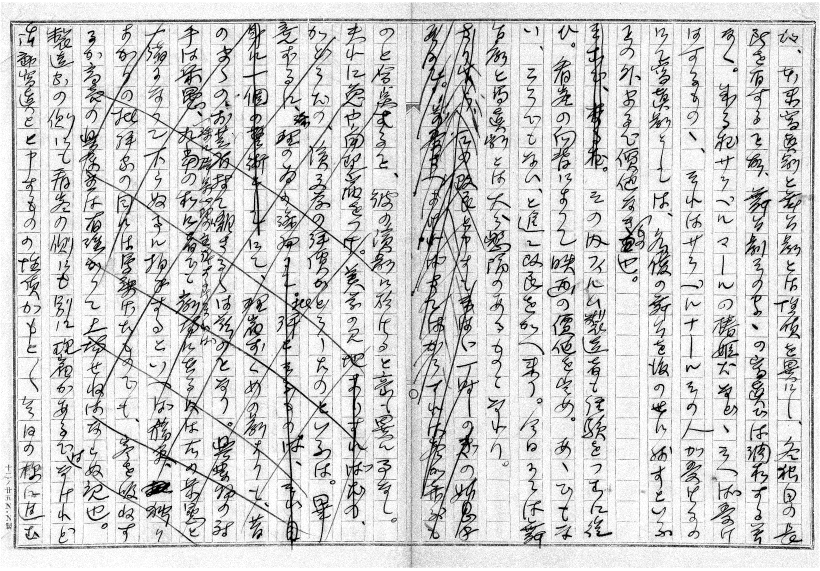
軈て看物が只活動する丈では満足せぬ様になるは、単調を嫌ふ人性の必然也。只さへ何の意味もなく動く丈けのもの故左程の人を呼ばざりしに、その唯一の頼みなる動くことに嫌きられては万事休す。何とか茲に一分別せざるべからざる訳也。恰かも此時、仏蘭西の手品使にてメリー［君］(Melies) といふ利口者、商売物の手品を應用して所謂魔術寫眞なるものを始め、［沈滞せる］活動寫眞界に一新生面を開きたり。同君が最初の試みは、黒布の背景の前にて黒き衣装を着たる手品使が、白色の物体例へば骸骨の様な



ものを［持ちて］動かして、恰かも無生物が自身で動く様に見せかける方法。手品師の方の所謂 Black art なるものにて、今日より見ればトリックと称するも如何かと思はるる、程幼稚なるものなりし由なれど、其後追々種々の方法を発見して、一時は全世界トリック熱に犯さる、程の時代を作りたるは御手柄と云ふべし。同君は英国のロバート、ポール君（Robert Paul）等と共に活動寫眞中興の恩人と申して差支なし。これが為世間の注意を活動寫眞に向けたる事実は非常なものなり。

このトリックは一方其儘の魔術寫眞として発達し、他方乱暴なる［滑稽］劇の手段となり、危険なる冒険劇の方弁となりて進歩せり。当時の看客は玩具の汽車の衝突や、玩具の軍艦の爆沈に驚嘆したるものなり。この時代迄はまだ〳〵劇らしき劇は存在せざりし様也。

然るに、トリックにも限りあり、さう〳〵違ったもの計り作る訳にも行かず遂には千篇一律の弊に陥り、看客の方にてもいつまでもトリックに欺かれて計りは居らず、種が割れて見れば思つた程稀しくもなくなり。もつと高尚な劇を望む様になり来れり。即ち始めは活動寫眞の機械的■特質に眩惑（ママ）せられて只活動的の興味にて満足せし看客が漸くその内容方面に要求を擴張し出したものと云ふべし。この



傾向に加るに、トリツク映画を作るには普通の映画よりも幾倍の労力と時間とを要する事が製造者側に取つて重大なる■原因を為し、遂に魔術寫眞の衰え［といふ現象。］舞台劇模放の開始といふことになりたる也。トリツクは今日にては滑稽劇や線画などに跡を止むるに過ぎず［多くは］主として劇に興味を副へる為の方弁として局所々々に利用せらる、のみとなれり。されど、トリツク利用の天才の出づることもあらば決してトリツク映画はこれにておはるものに非ざるべし。現に線画の如きは実物にては現し得ざるある種の皮肉を寫して大に歓迎せられ居る也。

さて活動寫眞劇の時代は出現せり。［始めは舞台劇の模倣を主とせしが］元来活動寫眞劇発生の原因と申せば、一つ舞台の芝居を寫眞で行つて見やうではないか。珍らしいのは勿論、第一手取早くて、安直で、それに思ふ様自然の風光を背景に使ふことも出來、トリツクの應用で舞台劇の眞似も出來ぬはなれ業も見せられると云ふものだ位の所也。始めは舞台劇そのま、の背景科介（ママ）にて寫せし

□、本来写真劇と舞台劇とは性質を異にし、各独自の長所を有すること故、舞台劇そのま、の寫眞では調和する筈なく。成る程サラベルマールの椿姫だなど、云へば受けはするもの、、それはサラベルナールその人が受けるのにて寫

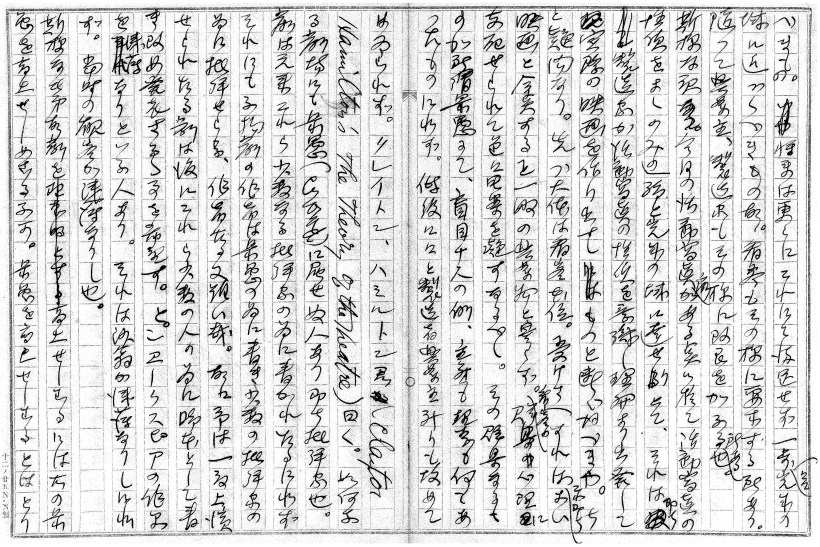
眞劇としては、名優の舞台を後の世に残すといふことの外まるで価値なき〔もの〕■也。

［を出で、なる程］その内フィルム製造者も経験をつむに従ひ。看客の向背によつて映画の価値を定め。あゝでもない、こうでもない、と追々改良を加へ来り。今日にては舞台劇と寫眞劇とは大分懸隔のあるものとなれり。

さり乍ら、この改良と申すも云はゞ、一時しのぎの姑息手段にて。芝居さへよければさてはかうすれ客が喜ぶものと合点すること、彼の演劇に於けると豪も異なるなし。夫れに兎や角理屈をつけ。美学の見地［よりすればだの、］がどうだの、演（ママ）文学の評価がどうしたのといふは。畢竟ずるに、論理の為の議論［にて。批評と云ふものは、それ自身に一個の藝術として］にて、理屈ずくめの劇よりも、昔のまゝのお芝居持て囃さる、は茲のことなり。興業師の対手は衆愚、〔殊に群集心理の主張する所によれば〕相當の利口者でも劇場にをる奴は右の衆愚と一緒になつて下らぬ事に拍手するといへば猶更、■独りよがりの批評家の目には馬鹿げたものでも、客を吸収するが商売の興業主は有難がつて上場せねばならぬ訳也。製造家の側にも看客の側にも別に理屈があるで〔は〕なけれど活動寫眞とと申すものの性質がもと〳〵今日の様に進むべきもの。［いや］将來は更らにこれにて満足せず一歩〔々々〕完成の域に近づくべきものなり。看客もその様に要求する所あり。随って興業主、製造家もその様に改良を加ふる〔所ある〕也。

斯様な訳にて今日の活動寫眞〔劇〕がある点に於て活動寫眞の性質をよくのみ込殆ど完成の域に達せ［る］りとて、それは■■〔即ち〕製造家が活動寫眞の性質を意識し理論より出発して■実際の映画を作り出せし■■ものと断じ得べきや。ちと疑問なり。先づ大体は看客本位。受けさへすれば〔これ即ち〕よい映画と合点すること一般の興業物と異らず。〔看客の〕群衆［の］心理■に支配せられて色々思案を凝すなるべし。その群衆なるものが所謂衆愚にて、盲目千人の例、主義も理屈も何もあつたものに非ず。低級々々と製造者興業主計りも攻めてはゐられず。クレイトン、ハミルトン君［が］（Clayton Hamilton's TheTheory of the Theatre）曰く。如何なる劇場にも衆愚（crowd）に屈せぬ人あり即ち批評家也。

劇は元来これら少数なる批評家の為に書かれたるに非ずそれにも不拘劇の作者は衆愚の為に書き少数の批評家の為に批評せらる、作者たる又煩い哉。故に予は一度上演せられ



たる劇は後にこれら少数の人の為に脚本として書き改め発表さる、事を希望す。と。シエークスピアの作品を［□□］浅薄なりといふ人あり。それは沙翁が浅薄なりしに非ず。当時の観客が浅薄なりし也。

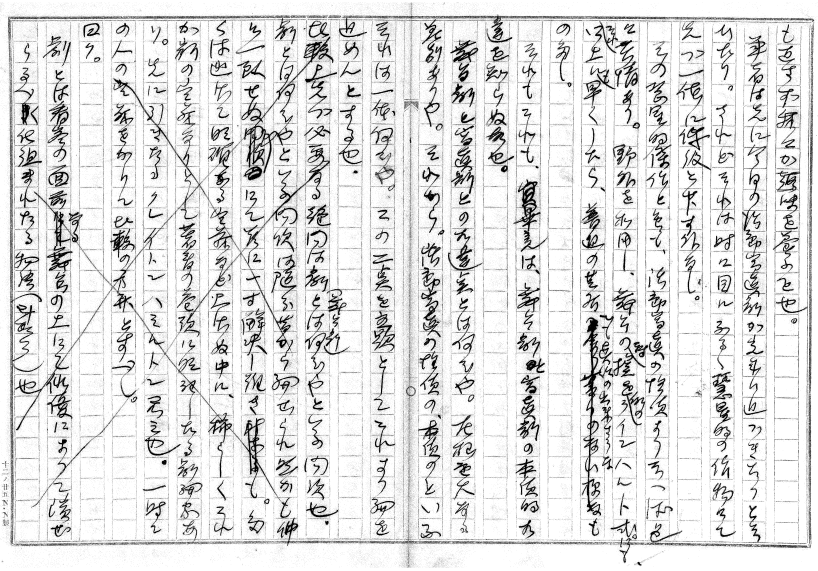
斯様な次第故劇を［理想的とする］高上せしむるには右の衆愚を高上せしめざる不可。衆愚を高上せしむるとはとりも直さず我々が趣味を養ふこと也。

筆者は先に今日の活動寫眞劇が完成に近づきたりと云ひたり。されどそれは時々目にふる、彗星的の作物にて先づ一体に低級と申す外なし。

その彗星的傑作と雖も、活動寫眞の性質より云へば色々苦情あり。野外を利用し、舞台の［□］握を［例の］ラインハルト式に□［それ］以上に［も］早くしたら、普通の芝居［でも眞似の出来さうな］［■□□□］りのない様なもの多し。

それもこれも、［寫］畢竟は、舞台劇と寫眞劇の本質的相違を知らぬ故也。

舞台劇と寫眞劇との相違点とは何ぞや。左程重大なる差別ありや。それから。活動寫眞の性質の、本質のといふそれは一体何ぞや。この二点を主題としてこれから論を進めんとする也。



比較上先づ必要なる疑問は劇（舞台劇）とは何ぞやといふ問題也。

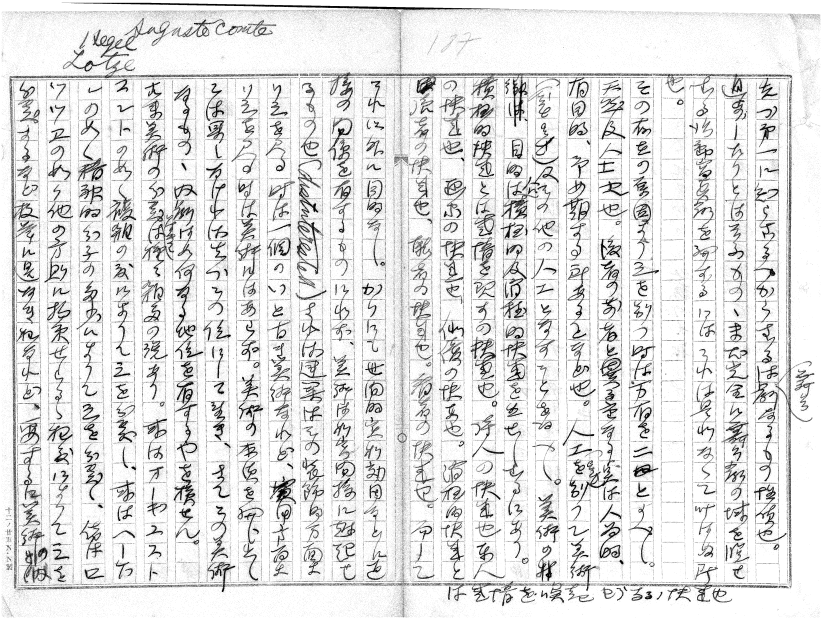
劇とは何ぞやといふ問題は随分昔から論ぜられ然かも仲々一致せぬ所［問題］■にて茲に一寸解決し難き［所ある］も。多くは逃げて明確なる定義など上げぬ中に、稀らしくこれが劇の定義なりとして著書の巻頭に明記したる劇論家あり。先に引きたるクレイトンハミルトン君之也。一時この人の定義をかりて比較の方弁とすべし。

曰ク。

劇とは看客の面前［にて］なる舞台の上にて俳優によつて演ぜらるべく仕組まれたる物語（story）也

先づ第一に知らざるべからざるは［舞台］劇なるもの性質也。

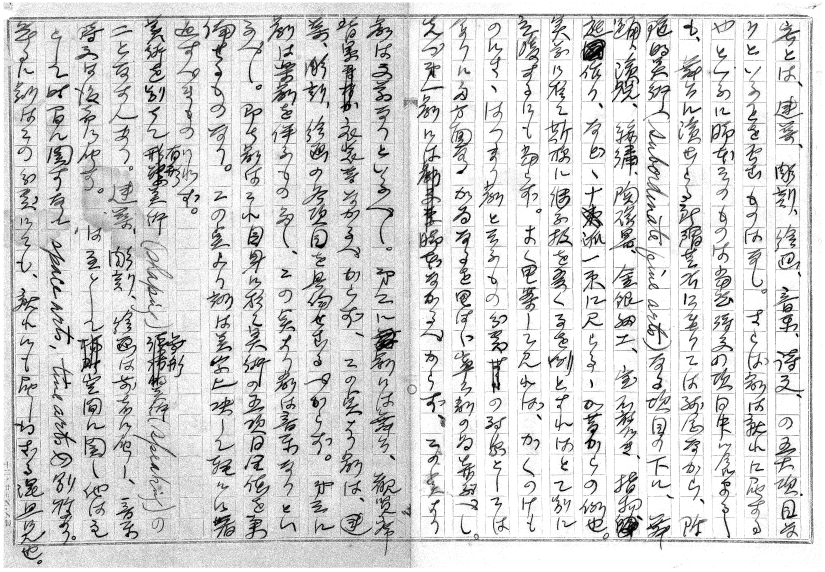
進歩したりとは云ふもの、まだ完全に舞台劇の域を脱せざる活動寫眞劇を論ずるにはこれは是非なくて叶はぬ所也。その存在の原因より之を別つ時は万有を二■とすべし。天然及人工之也。後者の前者と異る主なる点は人為的、有目的、予め期する所あることなど也。人工［art］を別つて美術（fine art）及その他の人工となすことを得べし。美術の［特徴は、］目的は［人に］積極的及消極的快感を生ぜしむるにあり。



積極的快感とは感情を現すの快感也。詩人の快感也楽人の快感也、画家の快感也、俳優の快感也。消極的快感と［は感情を喚起せらるるノ快感也］■読者の快感也、聴者の快感也。看者の快感也。而してこれ以外に目的なし。かりにも世間的実利効用などに直接の関係を有するものに非ず、美術は利害関係に越超せるもの也（dustuterested）されば建築はその装飾的方面より之を見る時は一個のいと古き美術なれど、実用方面より之を見る時は美術にはあらず。美術の本質を論じ出しては果しなければ先づこの位にして置き、さてこの美術なるもの、内劇は如何なる価値を有するやを検せん。

古来美術の分類　□□　は種々雑多の説あり。或はオーギユストコントの如く複雑の度によりて之を分類し、或はヘーゲルの如く精神的分子の多少によりて之を分類し、偖はロツツエの如く他の方則に拘束せらる、程度によりて之を分類するなど枚挙に遑なき程なれど、要するに美術［とは］の□

□とは、建築、彫刻、絵画、音楽、詩文、の五大項目なりといふことを否むものはなし。さらば劇は孰れに属するやといふに脚本そのものは当然詩文の項目中に含まる、も、舞台に演ぜらる所謂芝居に至りては残念ながら、附随的美



術（subordinate fine arts）なる項目の下に、舞踊、演説、絲繡、陶磁器、金銀細工、宝石磨き、指物、■庭■作り、など、十［束］派一束に見らるゝが昔からの例也。

美学に於て斯様に継子扱を受くるを例とすればとて別に立腹するにも當らず。よく思案して見れば、かくのけものにさゝはつまり劇と云ふもの分類［する］の対象としては余りに多方面なるが為なるを思はゞ寧ろ劇の為喜ぶべし。

先づ第一劇には［劇文学］脚本なかるべからず、この点より劇は文学なりといふべし。第二に［舞］劇には舞台、観覧席背景［等なか］衣装等なかるべからず、この点より劇は建築、彫刻、絵画の各項目を具備せざるべからず。第三に劇は楽劇を伴ふもの多し、この点より劇は音楽なりといふべし。即ち劇はこれ自身に於て美術の五項目全体を兼備せるものなり。この点より劇は美学上決して軽々に看過すべきものに非ず。

美術を別ちて有形［形態］美術（shaping）無形［情緒的］美術（speaking）の二となす人あり。建築、彫刻、絵画は前者に属し、音楽詩文は後者に属す。　は主として［場所］空間に関し他は主として時間に関すなど space arts, time arts の別称あり。然るに劇はこの分類にても、孰れにも属し得ざる混血児也。